



学校家庭科教材の裁縫道具と学習効果： 1977年から2016年までのカタログ調査から

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2023-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小松, 恵美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000007

学校家庭科教材の裁縫道具と学習効果

— 1977年から2016年までのカタログ調査から —

小 松 恵美子

北海道教育大学旭川校衣生活学研究室

Learning Effect Obtained Using Sewing Equipment of Home Economics on School

— Based on Catalog Surveys From 1977 to 2016 —

KOMATSU Emiko

Department of Clothing Science, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education, Asahikawa, 070-0825

概 要

1977年から2016年までの裁縫道具の商品カタログを調査対象として、裁縫道具がどのような変遷を遂げてきたのかを整理・分析した。裁縫道具に期待できると予想される「裁縫に関する技術習得」「針やはさみなどの危険物の取り扱い方」「整理整頓の習慣」「長く使うための物の大切な扱い方」「手指の巧緻性の向上」といった学習効果について考察した。裁縫道具は約40年の間に様々な改良点が見られ、時代に応じた魅力的で使いやすい工夫が盛り込まれてきたことが分かったが、一方で便利さゆえ学習効果が多くは見込めないなどの課題も見つかった。教師には、裁縫道具の特徴や課題を的確に把握し、学習効果を有効に引き出せるような知識と技術の向上が求められることから、今後は学校現場、教材販売会社、教員養成大学の連携が必要であると考えられた。

1. 緒 言

小学校では5年生家庭科での被服製作実習を開始するに当たり、児童に対して裁縫道具を購入することが推奨される。被服製作技能は小学校家庭科での学習により著しく向上するが、その維持や向上には日常生活の中での実践が影響することが明らかにされている¹⁾。

学校教育において裁縫道具は、「裁縫に関する技術習得」のための道具としての役割が第一である。それに加えて、裁縫道具を使いこなせるようになる過程においては「針やはさみなどの危険を伴う道具の取り扱い方」「次回使いやすいように、きれいにしまう整理整頓の習慣」「長く使うための物の大切な扱い方」「手指の巧緻性の向上」という学習効果も期待できるものと考えられる。

一方、裁縫箱の形状はプラスチック製や布地ポーチ型など年々変化・多様化しており、中に収められている裁縫道具も変化していることが推測される。本研究は、裁縫道具に期待できる学習効果を検討することを目的として、学校家庭科教材としての裁縫道具の変遷について調査・分析を行った。

2. 研究方法

2016年4月時点で学校教材販売会社（A社、B社、C社）に保存されていた1977年から2016年までの裁縫箱の商品カタログ等を調査対象とした。裁縫道具がどのような変遷を遂げてきたのかを整理・分析し、裁縫道具に期待できると予想される学習効果について考察した。

理・分析し、裁縫道具に期待できると予想される学習効果について考察した。

3. 結果と考察

3-1. 1977年から2016年にかけての裁縫道具の変遷

ここでは、教材販売A社の商品カタログ写真から読み取れた、裁縫道具の変遷の整理結果および考察について述べる。

(1) 基本セット

まず、基本セットの内訳を書き出し、年ごとに付属している用具をまとめた（表1）。

表1. 基本セット（A社）

	裁縫箱	針	針山	折針入れ	糸	指ぬき	ひも通し	へら	練習布	糸ばさみ	名前シール	手引書	配色板	糸通し	裁ちばさみ	メジャー	チャコペン	リッパー
1977	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
1978	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
1979	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
1980	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
1981	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
1982	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
1983	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
1984	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
1985	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
1986	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
1987	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	※1	※1	※1	○				
1988	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	↓	↓	↓	○				
1989	○	○	○	※2	○	○	○	○	○	○				○				
1990	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
1991	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
1992	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
1993	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
1994	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
1995	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
1996	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
1997	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
1998	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
1999	○	○	○	↓	○	○	○	○	○	○				○				
2000	○	○	○	↓	○	○	○		※3	○				○	※4	※4	※4	※4
2001	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	↓	↓	↓	↓
2002	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	↓	↓	↓	↓
2003	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	↓	↓	↓	↓
2004	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	↓	↓	↓	↓
2005	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	↓	↓	↓	↓
2006	○	○	○	↓	○	○	○		※5	○				○	↓	↓	↓	↓
2007	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	↓
2008	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	↓
2009	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	↓
2010	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	↓
2011	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	○
2012	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	○
2013	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	○
2014	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	○
2015	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	○
2016	○	○	○	↓	○	○	○		↓	○				○	○	○	○	○

※1…裁縫箱購入により、サービス ※2…針ケースに付属 ※3…c-pal以外には付属 ※4…3 wayにのみ付属せず ※5…2種類から選択制

1977年から内容物に大きな変化は無いことから、裁縫に必要な道具は昔から変わりがなく、この先も大幅な変更はないことが予想される。裁縫技術は現代の一般的な生活では毎日使うとは言い難く、調理技術などと比較すればどうしても軽んじられる傾向にある。しかしボタン付け等の補修、災害時で衣類が足りなくなった際の手直しなど、いざとなったときに求められるのが手作業の裁縫技術である。基本セットに含まれている裁縫用具を使いこなせるようになることが、いつでも活用できる技能の習得につながると考えられる。

裁ちばさみ、メジャー、チャコペン、リッパーについては2000年代に入らないと基本セットには導入されていなかった。だが、1900年代には性能の違う何種類かの物の中から選択できるようになっていたため、各自の使用頻度に応じて選べるよう配慮されていたと推察できる。しるし付の際に使用する道具は1977～1999年まではへらであったのに対して、2000～2016年はチャコペンがその代わりとして台頭したことが読み取れる。チャコペンはしるしが読み取りやすく、鉛筆型で児童も使い慣れた形である。しかし、へらは使わずとも、摩擦でしるしをつけるというやり方もあることを、爪アイロンなどで実習中に意識的に教えることもできる。そのような学習も布の特性を体験的に理解する上で重要なのではないかと考える。また現在は付属していないが、1980～1988年には配色板がセットとなっていた。これは中学校家庭科での衣服の配色コーディネート学習の際に使用することを目的としたものと推測される。

(2) 裁縫箱

1) 柄

裁縫箱の表面に印刷されているデザインを「和柄」、「動物(写真)」、「動物(イラスト)」、「キャラクター」、「スポーツ柄」、「ブランド」、「無地」、「イラスト」の8タイプに分類した。また、年代ごとにタイプ数及び総デザイン数(総数)を集計し、全年代を比較した。それらをまとめたものが表2である。

表2. 裁縫箱・柄 (A社)

※色付き：最低値および最高値

	和柄	動物 (写真)	動物 (イラスト)	キャラクター	スポーツ柄	ブランド	無地	イラスト	タイプ数	総数
1977	2								1	2
1978	2								1	2
1979	3								1	3
1980	3								1	3
1981	3								1	3
1982	3								1	3
1983	3	2							2	5
1984	2	2							2	4
1985	2	1	2						3	5
1986	2		4						2	6
1987	3		2						2	5
1988	2			3					2	5
1989				3(※1)	2				2	5
1990				3	1				2	4
1991				3					1	3
1992				4					1	4
1993				4					1	4
1994				3	1				2	4
1995			2	3	1				3	6
1996				6	2				2	8
1997				8	2				2	10
1998				9(※2)	1				2	10
1999				9		1			2	10
2000				10		2	6		3	18
2001		1		7	1		6		4	15
2002		1		6	2			3	4	12
2003		1		9	3			3	4	16
2004		1		11	3			3	4	18
2005		1		9	4			4	4	18
2006				10	3			4	3	17
2007				9	3			4	3	16
2008				9	3			4	3	16
2009				6	4			5	3	15
2010				9	5	2		6	4	22
2011				11	5	2		2	4	20
2012				12	6	2		1	4	21
2013				9	6	4		3	4	22
2014				11	6	3		2	4	22
2015				8	6	3		2	4	19
2016				8	7	3	1	3	5	22

※1 スヌーピーが導入 ※2 ディズニーが導入

結果より、1977年から主流は和柄であったが、1988年にキャラクターが登場して以降、和柄は販売が中止されている。88年の販売数が大きくキャラクターに傾き、和柄の需要がなくなった可能性がある。またキャラクターはその年以降、常に総数で最も多い割合を占めており、児童らの評価は高いことが伺える。さらに、1989年にはスヌーピーが、1998年にはディズニーが登場し、販売され続けていることも分かった。

また、イラストは2002～2010年までスポーツ柄と同じ程度の種類を販売していたが、ブランドが再登場した次の年の2011年以降、その種類は減少していることが読み取れる。ここにはおしゃれの低年齢化によるブランドへの注目度の高まり²⁾が垣間見えると考えられる。

加えて、タイプ数を見てみると、最も少ない1

種類は1977～1982年，1991～1993年と初期及び中期前半でみられる一方，最も多い5種類は2016年のみ見られた。また，総数を見てみると最も少ない2種類は1977，1978年である一方，最も多い22種類は2010，2013，2014，2016年と近年で多く見られた。

以上を合わせて考察すると，当初はタイプ数も少なく総数も少ないため柄の違いしか選べなかったが，近年ではタイプ数も総数も多くあり，多種類のタイプ及びそれらの中でも多様な柄を選ぶことができるようになったと言える。したがって，近年は裁縫道具を選ぶこと自体に楽しみを見いだせ，お気に入りの柄を選択できるようにすることで物を大切に扱おうとする気持ちが生まれやすくなっているのではないかと。さらにその気持ちが，裁縫そのものへの関心を高めることにもつながるのではないかとと思われる。

2) 形 状

裁縫箱の形状を分類し，表3にまとめた。形状はこれまで13種類製造されており，形状種別及び種類数で変化があった年で区切ると16期に分けられることが分かった。表の○印が右肩下がりになっている点も含め，メーカーは試行錯誤を繰り返して最適な裁縫箱を開発してきたと思われる。

また，販売年数が最も継続していたのは⑥～⑭期まで続いたe：二段式（両側ストッパー付き3way）であることが分かる。これは現場の需要が一定して続いていたということであり，使い勝手がよく，長年使用し続けられる形状であることが考えられる。

加えて，a～gまですべての裁縫箱はプラスチック製であったが，h：布地裁縫バック（ツインチャック）が登場した⑩期がひとつの大きな分岐点であると言えるだろう。この⑩期から⑯期まで布地製の裁縫箱は販売が続いており，人気があることが伺える。その理由として，同じ種類であっても形状やデザインが凝っており，ペンケース等に近いおしゃれなデザインのものが多いことが挙げられる。プラスチック製は形状として大きな変

表3. 裁縫箱・形状（A社）

※色付き：最低値および最高値

期	年数	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	個数
①	1977	○													1
	1978	○													1
	1979	○													1
	1980	○													1
	1981	○													1
	1982	○													1
	1983	○													1
	1984	○													1
	1985	○													1
②	1986	○	○												2
	1987	○	○												2
③	1988	○		○											2
	1989	○		○											2
④	1990	○													1
⑤	1991				○										1
	1992				○										1
⑥	1993					○									1
	1994					○									1
⑦	1995					○	○								2
	1996					○	○								2
	1997					○	○								2
	1998					○	○								2
	1999					○	○								2
⑧	2000					○	○	○							3
	2001					○	○	○							3
⑨	2002					○	○	○							2
⑩	2003					○		○	○						3
	2004					○		○	○						3
⑪	2005					○			○	○					3
	2006					○			○	○					3
	2007					○			○	○					3
	2008					○			○	○					3
⑫	2009					○			○	○	○	○			5
⑬	2010					○			○	○	○	○	○		6
	2011					○			○	○	○	○	○		6
⑭	2012					○				○		○	○		4
	2013					○				○		○	○		4
⑮	2014					○				○		○	○		3
	2015							○					○	○	3
⑯	2016							○		○			○	○	4

- a) 二段式（蓋取り外し可能）
- b) 三段式一体型（取り外し不可）
- c) 二段式（ワンタッチ蓋開閉）
- d) 二段式（両側ストッパー付き2way）
- e) 二段式（両側ストッパー付き3way）
- f) ブック型
- m) 二段式（両側ストッパー付き1way）
- g) 1.5段式コンパクト型
- h) 布地裁縫バック（ツインチャック）
- i) 布地裁縫バック（ワンチャック）
- j) 布地裁縫バック（ワンチャック/ポケット付）
- k) コンパクトバック型プラスチック製
- l) 布地裁縫バック（ポストン）

化があまり出せないため，差異化を図るためには表面のデザイン及び色合いで変える他はない。一方，布地製は種類に応じて形状のデザインを工夫しやすいため，一見では裁縫箱という印象を受けにくい布地製に人気があるのではないかと考える。

一方，「整理整頓の習慣」という点を考慮すると，布地製は用具を乱雑にしまうことも可能であったり，収納場所が毎回異なったりと，収納の習慣が身につく可能性は高くはない。一方，プラスチック製は仕切りがついており，決められた場所に収納しなければならないのでその習慣づけがなされやすいと言える。また，大きさについては布地製の方がプラスチック製よりも比較的小さく，持ち

図1. プラスチック製裁縫箱の変遷 (A社)



表4. 針 (A社)

	長針	中針	短針	まち針	刺繍針	ミシン針 (11番)	ミシン針 (14番)
1986-1988	3	1	2	10	1	2	0
1989-1992	3	1	2	10	1	1	0
1993-2006	3	1	2	10	1	1	1
2007-2009	2	2	2	10	1	1	1
2010-2016	2	2	2	10	1	0	0

運びや収納においても優れていたが、m：二段式（両側ストッパー付き1way）はプラスチック製でありつつ布地製と同じ薄さで製造されており、改良の兆しが見える。プラスチック製裁縫箱の変遷を写真で図1に示した。

3) 針・針山

これまで付属している針の種類は、長針、中針、短針、まち針、刺繍針、ミシン針（11番）、ミシン針（14番）の計7種であった。それらの年代ごとの本数の内訳を表4に示した。

針の本数の変更は4回あり、これまで変更が行われなかったのは短針、まち針、刺繍針であることが読み取れた。2007年に長針が3本から2本に、中針が1本から2本に変更されている。長針

を使う頻度が減り、その分中針の本数を増加させたのではないかと考えられる。

また、針の中で一番変更回数が多いのはミシン針であることが分かった。1989～1992年以外の年では2本ずつあったが、2010年からは1本も付属していない。背景として、ミシンにかかる授業時数の減少に加え、近年ミシン針は学校支給のところが多いため、折れることを想定しての予備は基本セットに必要なと判断されたのではないかと考えられる。

一方、針山の変遷をたどってみると、その変更点はかなり少ない。1997～1989年に針位置が印刷で指定されたデザインが施され、1990年に外側にホルダーが付き、1992年にライオンの絵柄が印刷されたのち1995年にはそれが廃止され、無地の針

山の形となっている。筆者の家庭科授業参観の経験から、児童は針山に針を刺して使うという習慣があまり身につけておらず、毎回針ケースの元の位置に刺し戻す者が少なくないと感じられる。使う度に針ケースに戻しては作業効率が悪いばかりでなく、針が曲がる原因にもなる。針を机上に置いて見失うことを防止するためにも、針山をしっかりと活用するという意識付けが重要である。そのためにも、初期の頃のように針位置を指定する、もしくはドットなどのデザインを針山に施して、針を刺す習慣づけにつながる工夫があればよいのではないだろうか。

4) 縫い糸

縫い糸ひと巻きを1とし、ひと巻きのうち2色以上配分になっているものはその色の数で1を割り、色と分量を数値化して比較を行った(表5)。

縫い糸の変遷は①～⑥期に分類できることが分かった。変更の回数は裁縫箱の形状と比べて少ないが、色や分量の推移は大きいことから、初年からずっと途切れることなく揃えられている色は赤・白・黒の3色であることが分かった。また、①と⑥期では3色とも個数は1個ずつで他色は導入されていない。さらにその中でも白は1個分の分量が初年度から変更がない。この3色は判別がつきやすく、基本的な色であるため採用されているのだと考えられる。

また、②③期では水色と桃色がセットされていたが、分量が②から③期にかけて減少しており、④期では廃止されていることが分かる。これは水色と桃色は彩度の低い分類となり、彩度の高い色に比べて彩度の低い色では色の識別が難しいためではないかと推測される。

④⑤期には緑、青、黄緑が新色として追加されていたが、⑥期では廃止されている。これらは活用回数が同量の赤・黒と大きく差がつくためではないかと思われる。個数に関しては、②期のみが4個入っており、その他は3個と変化がない。個数を増やすのであれば使用頻度の多い白を増やすべきであろう。

5) 裁ちばさみ

裁ちばさみの種類をa～iに分類し、販売状況を表6に表した。また、製品ごとの説明をカタログに載っている分のみ、特徴として箇条書きで書き出した。表を見ると、いずれの年も2種類以上販売していることが読み取れる。購入者の使用状況に応じて、その性能を選択できるようになっているのだと考えられる。

また、cよりハードケースが付属されるようになっていたことが分かった。これは、裁ちばさみも刃物であり危険物という認識から、安全に扱えるよう工夫されたのだと推測される。

加えて、fが導入された⑧期より右利き左利きを選択できるようになっている。はさみは裁縫道具の中でもっとも利き手に合ったものでなければ上手に使用できない道具である。このように選択できるようになったことによって、左利きの児童の布の裁断のしやすさが大幅に上がったことが予想される。

gがコンパクトとして販売された2000年は裁縫箱で1.5段式コンパクト型が販売された年であり、それに応じてこれまでのサイズより小さめに作られているものである。外箱が小さくなっているためその内容物も小さくなることはやむを得ないが、布の裁断ははさみの一度の開閉でより長く切る方が、はさみを細かく開閉して切るよりも裁断面が美しく仕上がるため、あまりコンパクト化をしすぎることは好ましくないように思われる。

グリップの工夫点も特徴として見られる。g、hはソフトラバー、ソフトグリップを採用しており握っても痛くないよう、疲れないよう、滑らないように考慮されていると考えられる。

6) 糸切りばさみ

糸切りばさみの変遷を図2に示した。裁ちばさみとは違い、いずれの年も販売種は一点のみであり、選択式ではないことが分かった。糸切りばさみは裁ちばさみと異なり、選ぶほどの性能の違いは大きく出ないためであると考えられる。

糸切りばさみの分岐点として、刃型が一つ挙げ

表5. 縫い糸 (A社)

期	年数	赤	白	黒	水	桃	緑	青	黄緑	個数
①	1977	1	1	1						3
	1978	1	1	1						3
	1979	1	1	1						3
②	1980	1	1	1	0.5	0.5				4
	1981	1	1	1	0.5	0.5				4
	1982	1	1	1	0.5	0.5				4
	1983	1	1	1	0.5	0.5				4
	1984	1	1	1	0.5	0.5				4
	1985	1	1	1	0.5	0.5				4
	1986	1	1	1	0.5	0.5				4
	1987	1	1	1	0.5	0.5				4
③	1988	1	1	1	0.5	0.5				4
	1989	1	1	0.33	0.33	0.33				3
	1990	1	1	0.33	0.33	0.33				3
	1991	1	1	0.33	0.33	0.33				3
	1992	1	1	0.33	0.33	0.33				3
	1993	1	1	0.33	0.33	0.33				3
	1994	1	1	0.33	0.33	0.33				3
④	1995	0.5	1	0.5			0.5	0.5		3
	1996	0.5	1	0.5			0.5	0.5		3
	1997	0.5	1	0.5			0.5	0.5		3
	1998	0.5	1	0.5			0.5	0.5		3
	1999	0.5	1	0.5			0.5	0.5		3
	2000	0.5	1	0.5			0.5	0.5		3
	2001	0.5	1	0.5			0.5	0.5		3
	2002	0.5	1	0.5			0.5	0.5		3
⑤	2003	0.5	1	0.5				0.5	0.5	3
	2004	0.5	1	0.5				0.5	0.5	3
	2005	0.5	1	0.5				0.5	0.5	3
	2006	0.5	1	0.5				0.5	0.5	3
	2007	0.5	1	0.5				0.5	0.5	3
	2008	0.5	1	0.5				0.5	0.5	3
	2009	0.5	1	0.5				0.5	0.5	3
⑥	2010	1	1	1						3
	2011	1	1	1						3
	2012	1	1	1						3
	2013	1	1	1						3
	2014	1	1	1						3
	2015	1	1	1						3
	2016	1	1	1						3

表6. 裁ちばさみ (A社)

期	年	a	b	c	d	e	f	g	h	i
①	1977	○	○							
	1978	○	○							
	1979	○	○							
	1980	○	○							
②	1981	○	○							
	1982	○	○	○						
	1983	○	○	○						
	1984	○	○	○						
	1985	○	○	○						
③	1986	○	○	○						
	1987		○	○	○					
	1988	○	○	○	○					
④	1989	○	○	○						
	1990	○	○	○						
⑤	1991	○	○	○	○					
	1992			○	○	○				
⑥	1993			○	○	○				
	1994			○	○	○				
	1995			○	○	○				
⑦	1996			○	○	○				
	1997			○	○	○	○			
⑧	1998			○	○	○	○			
	1999			○	○	○	○			
⑨	2000			○	○	○	○			
	2001			○	○	○	○			
	2002			○	○	○	○			
⑩	2003			○	○	○	○	○		
	2004					○	○	○	○	
⑪	2005					○	○	○	○	
	2006						○	○	○	○
	2007						○	○	○	○
⑫	2008						○	○	○	○
	2009						○	○	○	○
	2010								○	○
⑬	2011							○	○	○
	2012								○	○
⑭	2013								○	○
	2014								○	○
	2015								○	○
	2016								○	○

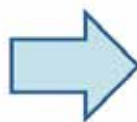
- a : ラシャ切りばさみ普及品
・高級ばさみ
- b : ラシャ切りばさみ極上品
・最高級打ち物
- c : 高級ステンレス裁ちばさみ
・切れ味抜群
・ハードケース付き
- d : スーパーステンレス
・最高の刃合わせ
・ハードケース付き
・抜群の切れ味
- e : ハイパーステンレス
- f : ニューステンレス
・抗菌
・右利き左利き用
- g : コンパクト
・ソフトラバー
・全長17.5cm
- h : ハイパーブレード
・ソフトグリップ
- i : たちばさみ
・ホワイト

図2. 糸切りばさみ (A社)

年	刃型	名 前	特 徴
1977 - 1984	U字型	文化ばさみ	持ち手が金属
1985 - 1987	U字型	糸切りばさみ	持ち手が金属, 安全ストッパー, 安全ケース
1988	U字型	糸切りばさみ	持ち手がプラスチック, 安全ストッパー, 安全ケース
1989 - 1996	V字型	糸切りばさみ	持ち手がプラスチック, 安全ストッパー, 安全ケース
1997 - 1999	V字型	糸切りばさみ	持ち手がプラスチック, 安全ストッパー, 安全ケース, 抗菌
2000 - 2016	V字型	ロック式糸切りばさみ	持ち手がプラスチック, 安全ストッパー, 安全ケース, 抗菌



1977年: U字型



2016年: V字型

られる。1977～1988年はU字型であったが、1989年以降はV字型に変わった。はさみに力をかけると、U字型は刃の部分全体が閉じていくが、V字型は刃の重なり部分から先にかけて段々と閉じていく。V字型は刃先まで毎回力をかける必要がないため、U字型に比べて仕事量は少ないと考えられる。

また、裁ちばさみと同様に危険物として安全面を高めるために、安全ストッパーと安全ケースが付属されたことも大きな変更点であるといえよう。糸切りばさみは、裁ちばさみに比べて刃先が薄く鋭利である上、刃が開いた状態が通常の状態であるため危険度が高い。したがって、刃先を覆う安全ケースや、それを外した時に急に刃先が開かないようにするストッパーがついていることは、危険を事前に取り除いている改良点であると思われる。危険な道具の取り扱い方も学ぶ、という裁縫本来の目的から少し遠のいてしまうとも感じられるが、改良可能な危険箇所をわざと残して児童を危険にさらす必要はなく、安全第一の学校体制を考えると然るべき構造的対策ではないかと考える。

7) 練習布

練習布のセットの内容物を整理し、年代別にその変遷をたどり、表7にまとめた。手縫い練習布・ミシン練習布・手縫いフェルトの欄には生地の色及びその練習布によってできる作品例、付属物、布の種類を、また刺しゅう練習布・無地フェルト・うろこフェルトには生地の色を端的にまとめた。なお、カタログに明記されておらず、写真からも判別できないものは年代の流れからある程度予想はできるが確証がないため、特徴としては書き表さないこととした。また、1977年から販売され続けている「和洋練習用布」と、2006年から販売された「作品ができる練習布」は別扱いとした。

注目すべき事項として、「和洋練習用布」が縫い終わると、何かしらの作品が完成されるようになった点が挙げられる。手縫い練習用布では1992～2002年に壁掛けが、ミシン練習用布では1996～

2002、2004～2010年にぞうきんが完成されるように作られている。ただの基礎縫いの練習としてその作業をさせるのではなく、ある作品を完成させるために行っているという児童に目的意識を持たせる工夫がなされているのだと推測される。授業参加の態度も大きく変わったことが予想される。またこれらに重点を置いて新たに登場したものが、「作品ができる練習布」である。これは基礎縫いを学ぶという基本習得を目的とした「和洋練習用布」よりも完成度の高い作品作りを目指すものであり、少々難易度が高く設定されている。しかしその分、完成作品例もウォールポケットやランチョンマット、花ふきなど実用性とデザイン性の高いものができあがるようになっている。実際に使う可能性の高いものであれば、児童も完成度の高いものを目指すようになり、集中力を持続する効果も見込めるのではないかと考える。

加えて、ボタンについても変化がいくつか見られる。今回は色の細かい変化は省略するが、注目点は表7の※4、※5の2点である。ボタンが大型化したことによって、手先がまだ十分に使えない児童でも扱いやすくなり、ボタン付けがし易いと考えられる。また、ボタンが透明になったことによって、布とボタンの間の見えにくかった糸が観察しやすくなり、糸の張り具合や針を刺す位置などの確認・調節が容易になったのではないかと推測できる。ただ、「作品のできる練習布」では作品完成に重点を置いているためか、ボタンが二つ穴の1種類のみで、四つ穴ボタンや足つきボタンは付属していない。手指の巧緻性の向上およびボタン付けの技術を身に付けるといった点からは、いささか物足りないように思われる。

さらに、※5にあるように基礎縫いフェルトにドットプリントがなされたことが大きな改良点であるといえよう。特に指定はせずともドットプリントがなされていることで、基礎縫いだけでなく、カタカナでの名前の縫い取りなど活用幅が増え、それと同時に同間隔で縫う感覚の練習ができることが利点としてあげられる。しかし、厚めの布であるフェルトでの手縫い感覚だけに慣れてしまう

表7. 練習布 (A社)

年	刺しゅう練習布	手縫い練習用布	ミシン練習布	かざり糸	ボ タ ン			手縫いフェルト	無地フェルト	うろこフェルト	説明書
					四つ穴	二つ穴	足付				
1977-1982	白	白	青								
1983	白	白	青								○
1984-1991	白	白	青								
1992-1993		クリーム 壁掛け	水 スパンボンド不織布	4色	桃・黄	茶	桃				○
1994		クリーム 壁掛け	水 スパンボンド不織布	4色	青	赤・赤	黄緑				○
1995		クリーム 壁掛け	白・綿布	4色	青	赤・赤	黄緑				○
1996-1999		クリーム 壁掛け	青・ぞうきん	4色	青	赤・赤	黄緑				
2000-2001		黄・壁掛け	青・ぞうきん		3色4個						
2002		緑・壁掛け フェルト木の葉	青・ぞうきん		4種4個						
2003		黄 フェルト木の葉	青		ビ	水	黄緑				
2004-2005		黄 きそぬいフェルト	青・ぞうきん		ビ	水	黄緑				○
2006-2007		黄 きそぬいフェルト	青・ぞうきん		ビ	水	黄緑				○
2008-2010		黄 きそぬいフェルト	青・ぞうきん		ビ	緑	青				○
2011-2014		黄 きそぬいフェルト	青		ビ	緑	青				○
2015-2016		黄 きそぬいフェルト	○		ビ	緑	青				○
2006-2010			白/青ベズリー柄 ウォールポケット			青		水 プチバック ウォールポケット	黄	エメラルド	
2011-2014			クリーム/青ベズリー柄 ランチョンマット			青		水 マスコット ウォールポケット	黄	エメラルド	
2015-2016			クリーム /青ベズリー柄 ウォールポケット 花ふきん			緑		黄 ネームプレート 小物入れ プチバック			○

※1…1981年より 手縫い練習用布に綿100%の表示
 ※2…1986、1987年 手縫い練習布で「教科書（東書、開隆）参考」の表示
 ※3…1992-1993年 ボタン付属との表示はないが、写真にボタンあり
 ※4…2003年以降、ボタンが大型化
 ※5…2007年以降、ボタンが透明になり、基礎縫いフェルトにドットのプリントが付く

と、綿布（さらし）など薄くて柔らかい生地への対応がしにくく、また運針の練習もしにくいことが懸念される。基礎の時点で様々な生地に触れて体験的に布の性質の違いを学ぶ経験も、手指の巧緻性の向上とも関わる大切なことなのではないかと推察される。

(3) まとめ

基本セット、裁縫箱（柄、形状）、針・針山、縫い糸、裁ちばさみ、糸切りばさみ、練習布について変遷を辿り、分析と考察を行ってきた。ここで一度、それらをまとめる。

基本セットでは、内容物に大きな変動は見られないことが分かった。この結果は、基本セットだけでできる裁縫技術は、日常だけでなく緊急時に

も役に立つ普遍的なものであるという視点で読み取ることができた。

裁縫箱の柄を分析したところ、タイプ数及び総数がおおむね増加傾向にあることが読み取れた。つまり、以前よりもデザインの選択肢が増え、好みの裁縫箱を所持できるようになった。これが外発的動機づけとなり、裁縫自体への意欲の増加に影響しているのではないかと推測された。しかし、おしゃれの低年齢化に伴う影響という点を考慮しても、これ程の種類が果たして本当に必要なのか、いささか疑問が残る。

裁縫箱の形状に関しては、13種類販売されているということが分かった。当初はプラスチック製の裁縫箱が主流であったが、途中から布地製が登場したことが大きな変化点であった。布地製はプ

プラスチック製に比べてデザインが豊富であり、多様化しやすいことが特徴として挙げられた。また、裁縫道具によって身に付けることが期待される「整理整頓の習慣」は形状に大きく関わってくると考えられた。最新の一段式（両側ストッパー付き1way）はプラスチック製でありつつ布地製と同じ薄さで製造されており、今後もさらに改善がなされることが期待される。

針については、その形状自体に変わった点は見受けられず、変更箇所は本数だけであった。2010年以降はミシン針が1本も付属されていないことが大きな変更点で、ミシン針は学校支給が多いという現状が背景にあると考えられた。また、針山も変更点が少ないが、針山を使わず針ケースに戻す習慣が身につけている児童に対して、デザインの工夫などで針山を使う意識付けが促せるのではないと思われる。

縫い糸に関しては、水、桃、緑、青、黄緑と他色が付属されていた年もあったが、近年では赤・白・黒がひと巻きずつという形態となっていることが分かった。

裁ちばさみはハードケース付きによる安全面の確保、左利きの者への配慮、コンパクト化の実践、ソフトラバー・ソフトグリップによる手の負担の軽減などの工夫点が見られることが読み取れた。その中でもコンパクト化は裁縫箱自体の小型化に伴うものではあったが、一度の開閉で長く切ることが望ましい布の裁断にとっては好ましくない変更点であると言える。

糸切りばさみに関しては、U字型からV字型への刃型の変更、安全性の強化が大きな変更点であると分かった。裁ちばさみよりも刃先が薄く鋭利である糸切りばさみによる安全面の様々な工夫は、安全第一な学校にとって有益なものであると考えられた。

練習布は裁縫道具の内容物の中でもっとも改善が繰り返されているものであることが分かった。特に2006年に作品ができる練習布という新しい枠組みができたことは大きいといえよう。基礎縫いをしながら何かしらの作品に仕上げるということ

は、作業自体に意味合いを持たせることにつながり、児童の意欲を損なわせない工夫であると考えられた。ボタンについても大型化・透明化されており、より児童が技術を身に付けやすいよう工夫されていることが分かった。

以上、裁縫道具の変遷の整理・分析及び考察から、どの内容物も差はあれど教材販売会社による試行錯誤の末、様々な工夫がなされてきた経緯を読み取ることができた。

3-2. 2016年当時の裁縫道具の分析と考察

3-1ではA社の裁縫道具の変遷について調査・分析および考察を行った。ここではそれらを踏まえ、2016年当時の裁縫道具を検証する。

まず「整理整頓の習慣」に関わると予想される裁縫箱の素材について分析・考察する。さらに、A社に加えて学校教材として裁縫道具を販売しているB社とC社の2016年度販売の商品も対象として、教材販売会社によって基本セットの内訳にどのような差があるのかを調査し、分析する。

(1) 素材による裁縫箱の比較

表3より2016年度に販売されているA社の裁縫箱はg) 1.5段式コンパクト型、i) 布地裁縫バック（ワンチャック）、l) 布地裁縫バック（ポストン）、m) 一段式（両側ストッパー付き1way）の全4種類ある。これらを素材としての観点でプラスチック製と布地製（エナメル製含む）に分けると、前者はgとmの2種類、後者はiとlの2種類であり、同数であった。

次に、これらを様々な条件で比較し、それぞれにどのような特徴があるのかを分析し、表8にまとめた。

その結果、プラスチック製、布地製（エナメル製含む）ともに一長一短があり、一概にどちらがいいとは言えないことが分かった。

裁縫道具に期待できる効果として「整理整頓の習慣」を考慮すると、プラスチック製は仕切りがついており、ある程度収納場所が固定されている。固定されているが故、指定の位置に戻さないと蓋

表8. 裁縫箱 プラスチック製と布地製の比較 (A社)

	裁縫箱の素材 分析の観点	プラスチック製	布地製	備考
		① 道具の収納	ほぼ平面収納	
② 材質		透明なプラスチック製	布製	
③ 仕切りによる収納		道具ひとつひとつの場所が指定	細かくは指定されていない	
④ 整理の習慣		パズル感覚で生徒が意図せずとも身に付く	意図的にしないと身に付かない	写真による収納の説明書は付随してある
⑤ 外観からの中身の確認		ほとんどがクリアで見やすい	判断できない	
⑥ 耐久性		割れる、長持ちする	落としても壊れない、耐久性は低い	
⑦ 使用時の机の広さ		狭い	広い	必要外のものはしまう授業形式が主流
⑧ 使用しないとき		置き場所に困ることもある	机の中、フックにかけられる	一概には言えない
⑨ デザイン性		蓋にプリントされている	ペンケースのようなデザインでおしゃれ	
⑩ 持ち運び(ランドセル)		ランドセルに入りにくい(専用の袋が必要)	単体でも持ち運び可能	

が閉まらず、半ば強制的に整理整頓の習慣が身につくことが予想される。一方、布地製はメッシュなどの仕切りがあるものの、指定された位置というのがなく、意識的に整理整頓しようという気持ちがないときれいに収納することができない。つまり「整理整頓の習慣」はプラスチック製の方が身に付けやすいと言えるだろう。

また、「物を大切に扱い、長く使う」ということを踏まえると、プラスチック製の場合は割れて使えなくなる可能性がある。一方、布地製はその心配がない。ただし、耐久性の面を考えると繊維製品は汚れや水濡れ、摩擦、引掛けなどで傷みやすい。それらの点では、プラスチック製よりも布地製品の方が劣化しやすいことが予想される。

(2) 基本セット (2016年度) の三社比較

A社、B社、C社の2016年度販売の商品を対象にして基本セットの内訳を調査し、表9にまとめた。

注目すべき点として、針・糸ケースの大きさが挙げられる。A社およびC社のケースは針・糸ケースが大きめに作られており、その中に糸や針山、リッパー、糸切りなどを収納可能なつくりになっている。一方、B社のケースは針・糸のみが収納される小さめのつくりとなっている。そしてそれとは別にプラスチック製のインケースがついており、そこに針・糸ケースや針山、リッパー、糸切りなどをまとめて納めておけるつくりになっているのである。どちらの形体でも机上のものを

整理するとき、ひとまとまりとなって物が雑然としないよう現場に適した工夫であることが伺える。また、将来を見据えて考えた場合、針ケースが大きすぎると持ち歩く際には不便なため、B社のように針ケースとその他の収納ケースをまとめない方が活用幅に広がりがあるのではないかと考える。

また、C社ではY字針が導入されており、ほかの二社には見られない特徴が見られた。Y字針とは押し込み式の糸通し機能のついている針のことであり、一般の針のように小さな穴に糸を通す過程がないことから、誰でも簡単に針に糸をくぐらせた状態にすることができる。針に糸を通すことは時間のかかる作業であり、Y字針は個人はもちろん、全体の授業進行速度を円滑に進める働きがあると推察できる。また、この作業を得意としない児童に対しては、裁縫への苦手意識を減らす効果があるのではないかと考えられる。しかし、手指の巧緻性を高めるとい裁縫本来の目的を考慮すると、このY字針に依存しすぎることに注意しなければならないと思われる。なお、その他にも長針、中針、ミシン針、縫い糸に三社による違いが見られた。

4. 裁縫道具の学習効果及び影響の検証

上記の結果及び考察を踏まえ、1で述べた「裁縫に関する技術習得」、「針やはさみなどの危険物

表9. 基本セット3社比較 (A社, B社, C社)

※色付き：3社で異なったもの

	A社	B社	C社
たちばさみ	1	1	1
糸切りばさみ	1	1	1
メジャー	1	1	1
チャコペンシル (赤・青)	1	1	1
ものさし	1	1	1
針・糸ケース	大	小	大
インケース	×	○	×
長針	2	3	2
中針	2	1	2
短針	2	2	2
刺繍針	1	1	1
ミシン針	0	2	1
Y字針	0	0	1
待ち針	10	10	10
針さし	1	1	1
指ぬき (長・短)	1	1	1
糸通し	1	1	1
縫い糸	白・黒・赤	白・(青/緑)・(赤/黒)	白・(赤/黒)
折れ針入れ	1	1	1
リッパー	1	1	1
その他			布製作キット

の取り扱い方], 「整理整頓の習慣」, 「長く使うための物の大切な扱い方」, 「手指の巧緻性の向上」など, 裁縫及び裁縫道具に期待できると予想される学習効果を検討する。

被服実習では日常生活をよりよくするため, 課題を見つけ, 工夫する経験を繰り返し行う。裁縫の基礎的な知識技能の習得が見込めるのはもちろん, 課題発見能力, 創意工夫の力や繰り返し行うという点では忍耐力, 集中力が身につくことも見込めると予想される。

また裁縫道具を扱うことは, 多種類の用具を把握することの大変さ, 小さく細かいものを慎重に扱うことの大変さ, 鋭利で危険なものを保管することの重要性を経験させられると考えられる。同時に, 元あった場所又は取り出しやすい, 探しやすい場所にしまうという整理整頓の習慣が身につくと思われる。

3-1ではA社裁縫道具の各用具の変遷を追っ

たが, その中でも特に, 裁縫箱の柄・形状, 針やはさみの危険物, 練習布において, 学習効果などが多く見込まれることが分かった。

裁縫箱の柄については, おしゃれの低年齢化とも結びつき, 多種類の中から選択できるようになった。お気に入りの柄を所持できることが外発的動機づけとなり, 裁縫そのものへの意欲が増加することが推測される。しかし, 物を長く使うという視点で考えると, 小学生の趣味嗜好寄りのデザインが中学生ないしは大人になっても好んだまま使えるとは言い難く, 飽きの来ないデザインに方向性をシフトするべきなのではないかとも考えられる。

また, 裁ちばさみ, 糸切りばさみには安全を重視した改良が繰り返しなされており, 安全ケースや開閉ロックなど, 危険が伴いにくい構造になっていることが分かった。加えて, 学校・教師側の対策としては被服実習の実習環境を整えるなど,

ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりに努めることも重要であると言えよう³⁾。ユニバーサルデザインを取り入れることで、児童を落ち着いた状態にさせ、危険を回避できると考えられる。

練習布については、裁縫に関する基礎的な技術を学ぶ上でもっとも影響力の大きいものであると考えられる。だからこそ、改良の変化が近年でも激しく、この先も引き続きその流れが変わらないように予想できる。2016年当時の練習布は「作品を完成させ、喜びや達成感を味わう」ことに重点が置かれているように捉えられる。ただし、それだけでは繰り返し学習による技術の習得に至らない可能性がある。例えば、毎時間の裁縫の授業始めに指慣らしの意味合いも含め、時間を測りながら並縫いを行える布等が練習布として付属されれば、より効果的なのではないかと考える。手指の巧緻性の向上の効果も期待できるだろう。

3-2では、2016年当時の裁縫箱を素材の観点から比較し、さらにはA社にB社、C社を加えた三社における基本セットの比較を行い分析した。

裁縫箱の素材では、2016年に販売されている裁縫箱は素材が大きくプラスチック製と布地製の2種類に分かれており、一概にどちらが優れていると提言することができなかった。だからこそ学校側はそれらの一長一短を見極め、被服製作の授業構成、学校・教室環境なども考慮し、適する方を選ばなければならないと考える。または、その短所を生活の課題としてとらえ、解決するという授業構成も考えうるのではないか。取っ手部分がなく持ち運びに不便なプラスチック製を選択した場合、それを持ち運ぶための袋を授業で作成するなどの構成が考えられる。それは同時に、日常生活の課題を見つけ、よりよくするために工夫するという教科の目標も満たすことになるだろう。

また三社比較において、注目すべきは針である考えた。C社で取り入れていたY字針の導入が一般化されると良いのではないかとと思われる。授業時数の少ない中で効率化をはかるためにも、苦手な児童も多い糸を針に通す作業が簡略化できると、縫うという作業により多くの時間を割くこと

ができるからである。ただし、Y字針に依存することは児童の手指の巧緻性の低下につながってしまう。普通の針を使いこなせるようにするために、毎時は使えないようにする、針に糸を通したまま保管する、使用する糸の長さを見計らう、糸の端を斜めに切るなどを教師から教えることが重要である。そのためにも教師自身が裁縫そのものの知識量を増やすことが大切ではないだろうか。これから教員となる可能性のある学生に正しい技能、指導技術、評価判断を身に付けさせるためにも、その機会を大学で設ける必要があるとも指摘されている⁴⁾。学校現場、教材メーカー、そして教員養成大学の連携による課題解決が求められていると言えよう。

以上を総合すると、裁縫道具の学習効果は予想していた四つの効果だけでなく、その他にも多くの効果・影響力があることが分かった。しかし、すべてが良い効果と言えるわけでもないため、教師がその長所・短所を事前にしっかりと認識し、短所にはその対応を見通して考え、長所は最大限の活用方法を考える必要があると思われる。

5. 結 論

本研究を行う動機となった「裁縫に関する技術習得」、「針やはさみなどの危険物の取り扱い方」、「整理整頓の習慣」、「長く使うための物の大切な扱い方」、「手指の巧緻性の向上」という、裁縫及び裁縫道具に期待できると予想される学習効果は、2016年当時の裁縫道具でも得られていたと考えられることが分かった。さらには、課題発見能力および創意工夫の力、繰り返し行うという点では忍耐力、集中力も身についたとも予想された。

裁縫道具の変遷及び現在の裁縫道具を分析したところ、各用具で様々な改良点が見られ、時代に応じた魅力的で使いやすい工夫が盛り込まれている一方、便利さゆえ学習効果が多くは見込めないなどの課題点も見つかった。

教師には、それらを的確に把握し裁縫道具の学習効果を有効に引き出せるよう、今後さらに裁縫

の知識と技術の向上が求められるだろう。学校現場、教材販売会社、そして教員養成大学の連携による課題解決が求められていると言えよう。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、貴重な資料をご提供賜りました株式会社文溪堂社、株式会社日本標準社、株式会社光文社に深く感謝の意を表します。また、本研究の実施に当たりご協力を賜りました山本晴香氏（元北海道教育大学旭川校生活・技術教育専攻学生）に深く感謝申し上げます。

引用文献

1. 小・中・大学生を対象とした被服製作用語の知識の実態，柏崎真理子，前田雄也，日景弥生，弘前大学教育学部紀要 101, pp.109-114, 2009
2. 教養としての被服教育を現代化するためのおしゃれ教育学（1－序説・その背景と目指すべき方向性），松本浩司，名古屋学院大学論集 社会科学篇 52巻3号，pp.141-154, 2016
3. だれもが「できる喜び」を味わえる授業のあり方を求めて－ユニバーサルデザインを取り入れた小学校家庭科の実践－，中村恵美子，愛知県西尾市立横須賀小学校 日本家庭科教育学会誌 58(2), pp.110-115, 2015
4. 被服製作基礎技能に対する学生の自己評価と被服実習授業の検討，赤崎真弓，長崎大学教育学部教科教育学研究報告26, pp.111-122, 1996

(旭川校教授)